

# OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱ ゾンタクラブ第31号 (2011年3月)



## 巻頭言

### 3月8日は国際ゾントアローズデー

会長 西村 博子

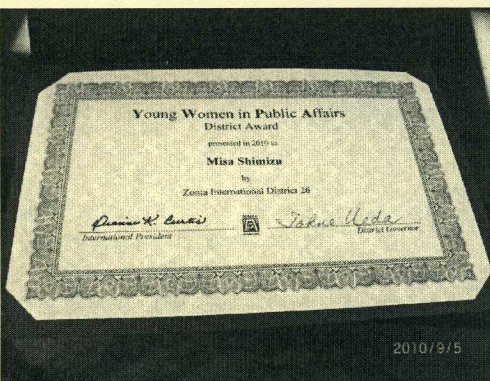


3月8日は、国際ゾントアローズデー♪ 世界中で、シンボルの黄色いバラを掲げて皆でお祝いしましょう！

1975年、国連は、3月8日を「国際女性デー」に指定いたしました。それは、1857年、ニューヨークで起きた衣料品縫製工場での火災で多くの女子労働者が亡くなり、これをきっかけに、女子労働者の低賃金、長時間労働、また劣悪・非人道的な職場環境に抗議する集会が開かれたのが、3月8日です。女性の功績を称え、女性への認識を高める日が制定されるには、随分長い年月がかかっていますね。国際ゾンタも国連に連携してこの日をローズデーとし、共に活動をしています。

3月、日本では多くの学生・生徒が、卒業式を迎えます。ご存知のように卒業式は英語の Commencement、始まりをも意味しています。未来にむけて羽ばたく若い人たちを、私たちゾンタは応援します。昨年、国際奨学金の一つであります YWPA (若い女性のための社会事業) 賞に大阪Ⅱから推薦された高校生清水美沙さんは、地区賞受賞後、ドイツに留学されお元気で異文化を学ばれています。近い将来、こうしたグローバルな視野にたった若い女性が、世界中で活躍されることでしょ。

今年度の活動も、あと数ヶ月となりました。2年後に迎えます私たちクラブの20周年に向けて、国内外の地域に根ざした奉仕活動をさらに展開できますよう、さらなる女性の地位向上を願い、皆さまと一緒に検討して歩んでいきたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。



YWPA地区賞 賞状



受賞者の清水美沙さんと



芳川 た江子

## 「かざぐるま」立ち上げの経緯・奮闘と9年目の現状

2010年9月9日の例会では「いこま福祉会」の理事長関谷多摩恵様と理事の草場暁美様をお招きして、「かざぐるま」立ち上げの苦労話を伺いました。「かざぐるま」を立ち上げられた前理事長の草場暁美様のお話で、年表をもとに、とてもわかりやすくお話してくださいました。

1971年(昭和46年)の10月10日に、草場暁美様のお嬢様の由美様が誕生され、待望の女の子で家族一同大喜びされたそうです。生後4ヶ月半のとき、高熱・ひきつけで10日間入院され、退院後も少し成長が遅れ気味で成長されていたそうです。1973年(昭和48年)に、大阪聖母整肢園にて脳性麻痺・自閉・多動と診断され、生後4ヶ月半の時の発熱(細菌性髄膜炎?)による障がいだとわかったそうです。草場暁美氏は何とも言われぬ気持ちに襲われたそうですが、それ以上に「障害」の言葉や意味などを知らなかったことの方がショックだったそうです。その後、由美様の育児に奔走され、それと同時に福祉活動を積極的に展開していかれました。

1980年(昭和55年)には「生駒市手をつなぐ親の会」会長(6年間)、奈良県精神薄弱相談員(11年間)、「生駒市障害児者を守る連合会」役員(8年間)、1982年(昭和57年)には生駒福祉作業所開所、運営委員(6年間)、1985年(昭和60年)には障害児性教育研究会理事(6年間)、1993年(平成5年)には「奈良県手をつなぐ育成会」理事(13年間)、1994年(平成6年)には「生駒市障害児者を守る連合会」会長(現在17年目)、1996年(平成8年)には「第2福祉作業所ぽけっと」開所、所長をされました。この時は家探しが大変で、障がい者が入るといっただけで断られたそうです。2001年(平成13年)には社会福祉法人「いこま福祉会」が認可され、2002年(平成14年)には知的障害者通所授産施設「かざぐるま」が開所し、土地は生駒市が提供してくれたそうです。2003年(平成15年)には理事長に就任(6年間)されました。このように、めまぐるしく福祉活動を展開していかれた一方、御本人のバセドウ病やうつ病の御病気、御主人の人工透析(平成4年亡くなられる)、母親のパーキンソン病(平成18年亡くなられる)と、御自身の御病気にもかかわらず、御家族の介護にも尽くされ、本当に頭の下がる思いです。

現在「かざぐるま」は、「デイサービスセンターかざぐるま」「生活支援センターかざぐるま」「福祉ホームおかりなの家」「ショートステイ」と4施設に増設され、施設開所以来9年目ですが、ほぼ定員一杯の状態だそうです。「かざぐるま」は、中心は障がいを持った人で、まわりの人の風でまわっていただけたいという意味で、つけられたそうです。

私の周りにも、障がいをもった子どもを持っておられる方が何人かおられますが、彼女たちに共通していることは、皆たくましく、その子ども達のおかげで自分も成長していけると言っておられることです。草場暁美様も、お嬢様の由美様のために福祉事業を展開していかれ「かざぐるま」を立ち上げられたことは、「母は強し」ということを改めて感じさせられました。



## 日本近代音楽の夜明け

宮本 典子



11月例会の卓話はクラブ会員 声楽家河村さと子さんによる“日本近代音楽の夜明け”でした。

明治の初め、それまで邦楽しか知らなかった日本に西洋音楽がどのように取り入れられていったか興味深いお話でした。

明治5年の国民皆学新学制によって音楽教育が小学校で唱歌、中学校で奏楽(楽器)に指定され西洋音楽を導入することに決定したが、当初は適当な教材も教師の人材もなく明治12年になって音楽取調掛に任命されたボストン出身のアメリカ人、ルーサル・メーソンが友人のドイツ人から譲りうけたドイツの教科書から多数の唱歌教材を引用し、アイルランド民謡、スコットランド民謡、歌曲、オペレッタ、賛美歌などのメロディを多数紹介した。3年後彼が解任され、ドイツ人のF.エッケルが着任したことにより日本では外国の音楽＝ドイツ音楽となってしまった。一方、キリスト教会では賛美歌があったが仏教界でも日曜学校が始められ、歌が取り入れられるようになった、また軍楽も音楽を広める役割をになった。

作曲では、政府留学生としてドイツで基礎を学んだ滝廉太郎が、明治33年(1900年)発表した『荒城の月』が、日本人の作詞・作曲による初めての歌曲であるとされたが、彼はメロディだけつけて早逝してしまった。伴奏をつけ歌曲として仕上げたのは山田耕筰である。彼は初めキリスト教徒として西洋音楽に出会い、苦学して東京音楽学校からベルリンの国立音楽学校で作曲を学び、その間に西洋のバロック、クラシック、ロマン派、近代音楽の神髄を会得した。帰国後は、日本の伝統音楽に回帰し北原白秋の詩に、多数の日本の歌といわれる曲をつくった。ベルリン時代のリヒアルト・シュトラウスとの出会いが影響を与えたと考えられる。彼はその後仏教徒となりボランティア活動をしたりオーケストラを日本に作ったりした。『荒城の月』の現在のメロディが滝廉太郎の音階と違うのは彼の修正?による。

1960年代以降日本の音楽は、楽譜に忠実なドイツ音楽の表現や西洋音楽語法にゆきづまり、東洋音楽、日本伝統音楽に解決の糸口を模索しつつ現代にいたっている。さらにジャンルも形式も変わって来ている。

日本の音楽がどのような歴史で現在にいたっているか、リヒアルト・シュトラウスと山田耕筰の歌の譜面と対比しながら、CDも聞かせて下さりながらの厚みのある話を短時間にまとめられ楽しい時間でした。

『坂の上の雲』や先日見た映画イサム・ノグチのお母さんレオニーの時代に思いを馳せ、学生時代新しい音楽と思っていたバルトークなどいまやクラシックかと思ひ感無量でした。



ZONTA INTERNATIONAL Zonta club of Osaka II 第187回例会「卓話」	
日 時	2010年11月11日(木)18:30~19:00
場 所	リーガロイヤルホテル アネックス 7F「ベウスタ」
卓話・話者	大阪Zontaクラブ会員 河村さと子
卓話・演題 「日本近代音楽の夜明け」	
1	はじめに 1867年の明治維新に伴い、政治改革・文明開化の嵐の中で日本の音楽事情は一変した。 1867年より1945年(太平洋戦争終結)に亘る日本近代音楽のあゆみの中での混乱を検証し、戦後の日本や世界の現代音楽への方向性を、一音楽家の立場より語りたい。
2	明治維新と日本の音楽 -1872年(明治5)「国民皆学新学制 制定」発布 音楽教育に關し、「唱歌」(小学校)、「奏楽」(中学校)指定 一しかし、… ①適当な音楽教材なし ②適当な教師人材なし 以上より「自分之アズ」(つげの久美子)
	-1879年「音楽取調掛」設置 ①音楽教師(ルーサル・メーソン、ロイデン・メーソン)招聘 ②アガタ人、メーソン(ボストン出身)は友人のドイツ人、ハイデルベルグ出身、ドイツの学校で使用されていた「唱歌教科書」を譲り受け、多数唱歌教材として引用した。
	-1882年(明治15)メーソン解任される。それまでにアイルランド民謡、スコットランド民謡、歌曲、アングロ・賛美歌等のソングブックを多数紹介 ミュージック ①メーソンと編纂者の事情 ②日本私塾会の反応 ③軍楽への寄与
	-1884年「明治17」メーソンの解任にドイツ人フランツ・エッケル着任 これにより、日本の近代音楽の礎としてドイツ音楽が定礎となる。

河村さと子さんと配布資料

## LAA委員会活動の推進を目指して

福本 敏子



新年明けましておめでとうございます。本年も、ご一緒に女性の地位向上のために国際 Zonta 会員として活動してまいりましょう。

今年は新年早々、嬉しいニュースが入ってきました。国際連合において、今までの4組織< UNIFEM(国連女性開発基金)、DAW(女性向上部)、OSAG(国連ジェンダー問題特別顧問事務所)、INSIRAW(国連調査訓練研究所)>がまとめられ、女性の地位向上のために“UN Women”という組織がアメリカのヒラリー・クリントン国務長官の肝いりで立ち上げられたそうです。国際 Zonta が目指している「女性の地位向上」がより全世界的に賛同され、今まで以上に良い結果を残していけることを期待したいと思います。

LAA 委員会は Bylaws の第 12 条第 9 項に立法意識・アドボカシー委員会として「女性の地位を改善し、立法意識、アドボカシー活動、平等を推進するために国際 Zonta の目的に沿った活動を推奨する。」と定められていますが、テキサス州サンアントニオの国際大会においても「自分たちの地域社会で効果的に支援活動を推進する。すべての奉仕活動が Zonta の目的とリンクするよう支援を確実に推進する。CEDAW(女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約)に重点を置き女性の地位問題の指導的提言者になる。」などが、目標として掲げられています。

大阪Ⅱでは「大阪府女性基金への寄付、日本フォスタープラン協会、いこま福祉会、FUJI 基金への支援、大阪市ゆとりとみどり振興への寄付、健康講座の開催」など多方面にわたる支援活動を展開しています。これらの支援活動の的確性を期すために、今後もチェックシートを活用していきたいと思ひます。

現在の日本の女性のおかれている状況は、教育レベルは世界の 10 位にありますが、社会的地位は残念ながら下位という男性優位の状況です。今後の若い日本女性が、性差に悩まされることなく、思うように活躍できる社会の礎石作りに、会員一丸となって頑張らましよう。

皆さまの、より一層のご支援をよろしくお願ひいたします。

※アドボカシー(advocacy): 支持、擁護、唱道

## チャリティ

## ベトナムの障害女生徒に刺繍の勉強の費用を届けました

宮本 典子



私達大阪Ⅱ Zonta クラブは 2006 年からベトナム・ベンチェの障害を持つ生徒の自立のため、職業訓練の費用を援助してきました。具体的には特別支援児学校の高校卒業後、学校に残って刺繍を習い、刺繍レベルアップの特別コースの設置で、Zonta の理念、女性の自立を目的としています。内容は学校に残って生活し刺繍を習う 10 ヶ月分の食費、先生の費用、教材です。元のベンチェ省知事、レ・フィンさんが「ベンチェ貧乏患者と障害者を支援する会」会長として監督され、また障害児学校の元副校長で定年退職されたデイエップ先生が生徒達の面倒を見て下さっています。お二人ともボランティアです。

これまででは FUJI 教育基金を通じて援助金を送って来ましたがこの度、機会があり、直接持ってゆくことにしました。

ベンチェはホーチミンの南西 60km ほど、メコンデルタの入口でこれまでではフェリーを使って 3 時間は十分掛りました。が、去年大きな橋が出来上り 2 時間もかからず行くことが出来るようになりました。橋を渡るとそれまでの建設中の工場や商店の風景は一変、ニッパヤシやココヤシの緑の田園に変わります。そこはベトナム戦争中最初に民族解放戦線が結成されたところで枯葉剤が沢山撒かれ、今も障害を持つ子の出生率が 10 倍も高い所です。

1 月 14 日こちらからは FUJI 教育基金の代表ルーンさんと他に二人、ベトナム側はレ・フィンさんとデイエップさんと贈呈式を行いました。感謝状(受領書)と盾を頂きました。

そのあと 17 人の生徒達と会食をし、ベトナムのお正月で、皆にお年玉をしました。

この 4 年の間に 9 人が刺繍で自分の食費をまかなえるようになり、1 人は結婚しましたが、近く 2 人が結婚することになったと嬉しい知らせもありました。それから 1 人(ニユンさん)は刺繍の傍らレ・フィンさんの会の薬を扱う仕事もできるようになったそうです。ベトナムでは刺繍は何処でも仕事

ができるいい職業ですが、生徒達にこれからどうしたい?と聞くとみんな一緒に刺繍をしたいといひます。親のない子も結構多いので、この子達の願ひを叶えてあげられたらいいなと切実に思ひました。

皆で食卓を囲み Zonta クラブの話もしました。是非みなさんでベンチェへきて下さい、そうすればどんなにいいでしょう、といわれましました。そして今後も支援をお願ひしますとのことでした。



レ・フィンさんから感謝状をいただく



刺繍をしている生徒達

ひょうごセルフヘルプ支援センター「創立10周年記念事業」に参加して

萩原 謡子



2010年9月5日(日)兵庫県民会館において 13時から16時半に亘り開催されました。

大阪IIゾンタクラブ社会奉仕委員のメンバー(西村会員、宮本会員、牛田会員、辻会員、久岡会員、笠置会員、萩原)がハンドベルでオープニングとエンディングの合奏、分科会に参加しました。そして、寄付も致しました。身体障害・身体病気・不登校児・発達障害児を持つ親の会・介護者を抱える家族の会・性的少数者・薬物依存症など28の団体が集まりました。

それぞれの悩みを解消したいという思いの中から様々な会が立ち上がりました。ニーズの数だけグループがあります。また、「障害は恥づかしい」「働かざる者、食うべからず」と言った伝統的な価値観から解放放たれるためにも仲間が必要です。どこに相談すればよいか困っていた悩みや情報を交換し合ったり、スキルを持ち寄ってサポートしあう体験者の集まりとなっております。そして、行政と連携しあうことによって、孤立する不幸を自分ひとりではなく分かち合い、助け合えるようになっております。

様々なテーマを持つグループの代表者がステージで発表されたあと、グループ討論会が行われ私達会員も参加しました。私は「登校拒否・発達障害」の分科会に参加したのですが、問題を抱えた方々の生の声を伺うことができ、とても勉強になりました。ハンドベルは「リコーダーアンサンブル・アマリタ」という障害を持つ方も含まれたグループと一緒に演奏しました。当日までに宮本会員のお宅に集まり2回練習しました。また、事前の打ち合わせで「アマリタ」の練習会場となっている三宮の青少年会館にも2度足を運び、合同練習をしました。

練習の甲斐があり、当日は気持ちよく演奏することが出来ました。ハンドベル演奏は「エーデルワイス」「世界にただ一つの花」。銭太鼓をマラカス代わりにして、「コンドルが飛んで行く」「ラデッキー行進曲」「いい日旅立ち」の合奏にも加わりました。演奏者の気持ちが一つになり、素敵なハーモニーが会場に広がりました。

ハンドベルの優しい響きが皆様の心に届いたかしら？



合同練習



本番





2010年10月31日、宇治散策の移動例会が行われた。参加者は、西村会長をはじめ、牛田、笠置、辻、久岡、ヤブケ、芳川、幡山、そしてゲストのヤブケさんのお嬢さんと9名であった。当日は雲空の下、宇治十帖スタンプラリーが行われており、大勢の参加者がラリーの手続をする間を抜けて、まずは源氏物語ミュージアムへ行く。

源氏物語ミュージアムは平成10年に宇治市によって開設された博物館で、源氏物語の世界を映像や展示で視覚的に捉えることができるよう工夫が凝らされている。

ツワブキの黄色い花が1輪咲く庭をガラス越しに見て玄関に入ると、右手に企画展示室があり、その日は、「瀬戸内寂聴と20人展」と題して、紫式部文学賞20周年を記念して受賞作家の作品が展示してあった。続く平安の間では、源氏物語のあらすじをハイビジョン映像で紹介し、平安時代の装束や調度品、牛車、貝合わせや双六、囲碁など貴族の遊び道具などが実物展示されていた。紫の上や花散里、明石の君が住んだ六条院の模型も展示されており、文字だけでは想像できなかった御殿が、その名前の示すとおり春夏秋冬それぞれの季節に合わせた庭を持ち、広大な敷地に田の字型に配置されていたことが良く分かった。

映像室では、映画『橋姫』が上映されていた。宇治橋に祀られているといわれる守護神の橋姫が、宇治十帖に出てくる大君、中の君、浮舟の3人の女性の生き方を見つめて、男の身勝手を嘆くという映画だそうだが、昼食の予約時間が迫っていることもあり、映画を見る人を残して、数人で先に、紅葉の大木がトンネルのように生い茂っている「さわらびの道」を昼食会場へ急いだ。

途中花嫁行列の一行に出会った。宇治上神社で挙式をされるのであろうか。世界遺産に指定された神社での挙式はさぞかし一生の思い出になるだろうと思いながら、朝霧橋、中の島、橋橋を渡って平等院の表参道にある昼食会場〈竹林〉へと到着した。しばし後続グループを待って、そろったところで京料理のお弁当に舌鼓をうち、その後平等院へ向かう。

平等院へ入ったところで雨が降り出した。鳳凰堂は、何度見ても美しい。昔はもっと色彩にあふれた建物だったであろうが、今は退色して、周りの景色に違和感なく溶け込んでいる。鳳凰堂の内部へは入らなかったが、鳳凰堂の中のご本尊阿弥陀如来坐像が堂内のライトに照らされて、お顔が黄金色に浮かび上がっているのを、池越しにみることができた。

時の関白藤原頼道は、何を思ってこの池の周りを散策したのだろうか。宝物館である鳳翔館では堂内の四方の壁に取り付けられた雲中供養菩薩像の一部を真近に見ることができた。菩薩像は笛、鼓、琵琶、琴、太鼓などいろんな形の楽器を持っており、踊っているらしい像もあって、藤原氏や当時の人々が考えた浄土の世界を垣間見ることができた。

紅葉はまだ一部がほんのりと赤みを帯びているだけであったが、例会を欠席ばかりの私にとって、久しぶりに皆さんとお目にかかれ、日頃のご無沙汰を感じることなくおしゃべりができ、とても楽しい秋の行楽の一日であった。計画くださった役員の皆様に深謝。



## 映画『アメリカ 永遠の翼』を見て

牛田 三千子



1920年代から30年代にかけて、女性飛行士として活躍し、ゾンタクラブの創設にも深くかかわった女性、アメリカ・イアハートの生涯を描いた映画『アメリカ 永遠の翼』を、先日(2010年12月9日)鑑賞しました。

私たちゾンシャンにとっては、「アメリカ・イアハート基金」などを通じて、先駆者であるこの女性の名声は、よく知るところです。しかし、実際アメリカが、どのような女性であり、どのような環境で偉業を成し遂げ、どのような生涯を送ったのかは、この映画を通じてはじめて理解できました。

大空を自由に飛ぶ…このことに人が惹きつけられるのは何故でしょうか。飛行機がひとたび空に飛び上がってしまうと、三次元の無限の広がりの中に身を置くことになります。特に、現在の大型ジェット機ではなく、70～80年前の小型機に乗ると、自分がまるで鳥になったような解放感があるのだと思います。女性にとって、閉塞感の強い当時の社会にあって、空を飛ぶという冒険心、困難なことを成し遂げたという達成感、何物にも代えがたいものであったことでしょう。

アメリカは、1897年、カンザス州の生まれ。子供の頃からの飛行機への夢を实らせて、1928年には、大西洋を(乗客として)横断した初めての女性となります。J.パットナムという好伴侶を得て、セレブな女性としてマスコミにもしばしば登場する一方、女性の社会的リーダーとして各種団体の設立にも手を貸しています。そして、1932年には、女性として初めて単独で大西洋を横断します。

華々しい業績を描くだけでなく、この映画はアメリカのプライベートな面にもスポットを当てています。パットナムとの結婚の際、「もし1年たっても、夢を追う自分との生活に幸せを見いだせないなら離婚する」と宣言したアメリカを愛し続け、共通の友人ジーンとの不倫(?)をも寛大に受け入れ、妻を支えた夫パットナム。今から80年前に、このような男性がいたことは驚きです。パットナムをはじめ、多くの人々の支援があって数々の偉業は成し遂げられました。しかし、1937年7月、彼女は太平洋ハウランド島付近で消息を絶ってしまいます。この最後の飛行と失踪については、さまざまな憶測があるようですが、映画ではあまり説明されていません。

この映画は、ヒラリー・スワンク、リチャード・ギア、イアン・マクレガーという魅力的なキャストに加え、監督はインド人女性ミラー・ナイールということで、その点からも楽しみな映画でありました。映像も美しく、期待通りの素晴らしい映画でした。二次元の平面に、どっかりと足を下ろしている私にとっては、高いところは苦手で、異次元の魅力より恐怖心が先にたってしまいます。しかし、「冒険のある人生は楽しい」「夢に限界などない」というアメリカの遺した名言は、内向き志向といわれる今の日本人にとって、ちょっぴりカンフル剤になるかも知れません。

## 親睦旅行

## 「瀬戸内の絶景と美味満喫の旅」報告

田中 茂美



毎年、国内旅行を企画し、普段なかなか行けない場所、お宿、体験等を思いっきり盛り込んだ恒例の旅の報告です。御蔭さまで10年目になりました。2010年10月10日～11日の一泊旅行は、今、話題の人気スポット「直島」のベネッセ現代アートを観光し、エクシブ鳴門サンクチュアリビラ・ドゥーエに宿泊しリゾートを満喫すると言う欲張りな企画を立てました。参加者(敬称略で失礼致します)牛田・内藤・中塚・久岡・芳川・田中の6名でした。

10日の午前7時に大阪・芦屋を内藤・田中の車で出発し高松港に10時30分に到着し、高速船で直島に11時40分到着、バスでベネッセ村に12時に向かう予定でした。おりしも瀬戸内芸術祭の渦中で埠頭は人であふれ、乗船整理券は既に無く、直島行断念?と思いきや、偶然にも海上タクシー(1軒しかない)をチャーターでき計画より快適に直島に着きました。直島は草間弥生の不思議なかぼちゃのモニュメントが迎えてくれました。ベネッセミュージアムでは、学芸員の方の説明を伺い「蟻の作った前衛絵画」「水平線の写真」「壁から生まれた芽」「海と空のアート」など見た目だけでは理解できない奥深い意義に驚き、上から見た瀬戸内海の絶景に感動し、島全体がアートで再生し過疎から生まれ変わろうとしていることに希望を感じました。ミュージアムで和食点心を昼にいただき、再び高松から鳴門へ車を走らせ5時にホテルに着きました。2人1部屋で124㎡のスイートのテラスから夕暮れの瀬戸内の絶景が見えました。食事は季節の特別献立をお願いし、淡路産あわび・イセエビ・マツタケ(国産)・阿波牛と地元産の山海の食材を用いた美味のお料理でした。食後、暫く休み、各自でスパとエステを好みに合わせたメニューで疲れを取りました。

翌朝は、寢室のベッドから紺碧の瀬戸内を眺め、リビングのソファからもテラス越しに美景を見、朝食の個室からも絶景を満喫しました。丁寧な朝食の後、散歩やスパ、ホテルのサロンでお茶を楽しんだり、エクシブ鳴門の方へお買い物に行ったりして午後には帰途に着きました。遅めのお昼は鳴門北のホテルモアナコースト・レストランで地元産のあわびステーキ、イセエビのパスタ、鳴門鯛の塩窯焼き等を堪能し美味満喫をしました。瀬戸内の絶景と美味で心もお腹も思いっきりいっぱいになり、車に分乗し家路につきました。とても楽しい旅を今年もさせていただき皆様に感謝しています。次年度も乞、ご期待!





私は、2001～2010年まで、“ネパールの子どもを育てる会”の理事として、ボランティア活動をしてきました。2010年1月3日、榎本明彦会長の逝去で、活動を終了しました。今までの活動報告をさせていただきます。

**主な事業実績**

1. 無料診療事業 チトワン県ナルパラシ地区ゴスタッド・ゴチャダ村  
1996年より1回のペースで、ネパール人医師、薬剤師、看護師、ボランティア総勢30名で2日間、内科、小児科、婦人科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科の診療を行った。(その年で診療科目は変動)  
4回目の診療事業では受診者が2000人となり、その後、治安悪くなり、広報活動ができなくなりましたが、それでも1600人受診されました。私は現地に3回行きました。
2. ニット編み技術トレーニング事業 カトマンズ市  
1994年より、ネパール最大の孤児院ベルマンディール内に、ニット編みトレーニング教室を設置。孤児が自活できるように、ニット編みの技術を習得させ、その編み賃を貯めておいて、孤児院から巣立つときにまとめて各児に手渡した。
3. 里親里子制度  
日本で里親を探し、“里親基金”1年間5万円で、孤児院自体とその孤児を支援。
4. 学校校舎建設事業
  - 1校目 1991年 パタン市 福祉小学校(孤児と貧しい子供たちのため)
  - 2校目 1993年 チトワン市ピツワ地区タロ村 小中学校(3階建て12教室)  
郵政省ボランティア貯金の配分金支援により
  - 3校目 2001年 チトワン市ゴチャダ村 小中学校(2階建て10教室 900人)  
山本和子基金との合同事業
  - 4校目 コシ県テラトム地区ソリジュン村 中学校(2階建て16教室 600人)  
大阪東南ロータリークラブとの合同事業
5. 診療所建設、開設
  - a.1993年 パタン市プルチョック:アッチェソル・マハビハール・ヘルスセンター開設。耳鼻咽喉科診療医療機器、マイクロサージェリーのための医療機器寄贈。
  - b.1995年 チトワン市ゴチャダ村(無医村)にヘルスポスト(診療所)を建設。
6. 植林事業、チトワン市 2200木 大阪東南ロータリークラブとの合同事業
7. 救急車寄贈
  - 1992年 パタン市アッチェソル・マハビハール・ヘルスセンター
  - 1995年 ルンビニ県タナフ地区ダマウリ村の村開発委員会へ寄贈。モービルクリニックが始まる。
  - 1995年 全ネパール婦人協会カトマンズ支部へ寄贈。カトマンズ郊外へのモービルヘルスキャンプを開始。
8. 公衆便所建設事業 1995年 パタン市内に2か所

私が直接現地でできたのは、第4回、5回、6回の診療事業でした。2007年の第7回は、息子も一緒に行くように薬も航空券も手配していましたが、4月初旬に治安があまりに悪いということで、日本人医師は現地に行けず、ネパール人医師達におまかせしました。この時も1585人受診しました。私は1回の診療事業2日間で300人ほどを診察しました。翼状片が多く、手術後の人もかなりありました。甲状腺腫の大きくなっている人も多くみました。ネパールは海がないので、慢性のヨード不足によるもので、地方病です。私たちの診療事業はベースキャンプになる診療所を持っているので、村の人たちと心の交流を持てたことがよかったと思います。村を歩くと皆、家からでてきてくれます。小さな男の子に、僕は知っているよと英語で言われて、うれしくなりました。私は診察していない子供でしたが、外から沢山の子供が、診察しているところを、眼をかがやかせて見ていました。そのなかの子供だったと思います。ネパールの平均寿命は52歳で、私も暑いところで朝8:30から6時まで2日間診察するのは、もう無理です。とても楽しい充実した活動でした。大阪II ZONTAクラブの温かいご支援を感謝しています。

**編集後記**

寄付や奉仕活動をするなら、今いばんそれを必要としている人々にしてあげたいと誰しも考えるのではないのでしょうか。でも、誰がどういふ助けを求めているかを的確に知ることは、個人ではなかなか難しいことです。だからこそ、ゾンタのように大きな国際団体が生まれるのでしょう。その一員であることを誇りにしたいと思います。